

「は」 VS 「が」と日本語教育

今村 一子

キーワード：とりたて助詞、格助詞、主題、情報、係り性

要旨

「は」と「が」の使い分けは言語学的にも日本語教育においても難しい分野である。現在この両者の使い分けの原理としていくつかが挙げられているがそれらは取り立て助詞としての「は」の用法から必然的に生み出されたものである。この用法からの「は」の性格に格助詞である「が」がほぼ対立的な特徴を持って対峙しこれらの原理を構成している。この時「が」は単なる格助詞としての役割を越えた特殊なニュアンスや用法を持つようになる。

主題文が文型として確立している日本語では、その教育現場において「は」の主題を提示する用法を分かりやすい文型の登場に合わせて積極的に教えてゆく必要があると同時に「が」の文は基本的に情報の原理を使うことでより広く使い分けの問題に対応できるのではないか。

1. はじめに

主格名詞の後に現れる「は」(取り立て助詞)と「が」(格助詞)に関する研究はこれまでも多くなされている。この使い分けについて「この種の言葉遣いのきまりは一般に母語を習得する幼児が非常に早い時期に、生活の中で身につけてしまうものである。日本人にとって英語の冠詞の使い方(the,a,ゼロ)はいつまでたっても難しい事のひとつだが、英米人にとっての「は」「が」使い分けの難しさといろんな点で共通するところがあるように思う。」(寺村秀夫1978)とあるようにもしこの文法分野が人間の生まれ持った言語能力が開花する段階で獲得される能力であるとすれば多くの学習者がすでに母語を持つ大人が主である日本語教育の場合、この問題が簡単にはいかないことは当然予想できる。

この文法項目は他の項目同様、日本語教育においては文型の中に組み込まれ文型全体として覚えさせ学習させるような形で進められている。しかし学習が進むにつれ学習者は主格を受ける助詞がある時は「は」であり、ある時は「が」であることに疑問を持ちその使い分けについて質問をする。「が」を含め格助詞はどれもその前の名詞項目(補語)が述語に対しどのような意味的関係を持つかにより明確な使い分けがなされている。それに対し本論で問題とする取り立て助詞「は」と格助詞「が」が主格名詞を受ける時の使い分けは多面的でいくつかの使い分けの原理が関与しているため簡単ではない。本論では「は」と「が」に関する文法的考察をし、教育現場におけるこの問題の扱い方を具体的に観察した

後、この問題の対応に一貫して使える足場となりそうなヒントをまとめてみたい。

2. 「が」を含む格助詞について

格助詞はその前の名詞項目（日本語文法ではこれを補語と呼ぶ）が述語に対し意味的に何を表すかを示す文法的要素である。日本語学習においては格助詞を含めた助詞の使い方の習得は大きな比重を占める。英語や中国語では語順が文の意味を左右するのにに対し日本語では格助詞の使い方とその意味が決まるからである。そうであっても格助詞同士の使い分け自体は学習者にとって時間をかければそれほど難しい事ではない。ある格助詞が述語に対し表すものは決まっており各格助詞は正確に使い分けがなされているからである。その事を示す例として例えば『場所』を表す格助詞の体系を見てみると次のようである。

『場所』を表す格助詞群

- (1) 「に」 その前の補語が到着点である事を表す。「家に帰る」「バスに乗る」
- (2) 「を」 その前の補語が出発点である事を表す。「家を出る」「大学を出る」
- (3) 「を」 その前の補語が通過点である事を表す。「道を歩く」「橋を渡る」
- (4) 「で」 その前の補語が動作、出来事の場所である事を表す。
「川で泳ぐ」「神戸で地震が起きた」「家で遊ぶ」
- (5) 「に」 その前の補語が存在の場所である事を表す。
「庭に猫がいる」「町にテレビ塔がある」

上の使い分けに従い次のような非文（文頭に*で示す）や普通の状況では受け入れられないと考えられる文（文頭に?で示す）もその理由の説明が問題なく可能であり、実際の教育現場においても明解な説明が可能である。

- (6) a 山に登る a' ヘリコプターで山に登る * ? a" 坂に登る
 b 山を登る * b' ヘリコプターで山を登る b" 坂を登る

「に」は前の名詞（補語）が到着点であること、「を」は上で見た（3）の通過点であることを表す。b'が非文であるのは「ヘリコプター」は山道を通過することはあり得なく、a"が非文であるのは「坂」は登りながら通過する通り道ではあっても到着する場所とは考えにくいからである。

- (7) a 川を泳ぐ a' 川を泳いで渡る
 b 川で泳ぐ * b' 川で泳いで渡る
- (8) a 文化会館に喫茶店がある。
 * b 文化会館にコンサートがある。

c 文化会館でコンサートがある。(=文化会館でコンサートが行われる。)

同様に(7)「を」(通過点) VS 「で」(動作、出来事の場所)、(8)「に」(存在の場所) VS 「で」(動作の場所)、というそれぞれの格助詞の表すものの違いにより(7)と(8)のすべての文が説明できる。(8)では動詞「ある」の使われ方の表層構造における曖昧さをも越えた格助詞の明解さが現れている。

3. 「が」(格助詞)と「は」(取り立て助詞)

(9) a 空が 青い。 a' 今朝、空が 青い。
 b 空は 青い。 b' 秋の空は 青い。(秋の空について言えば～)

(10) a 空(が)は 青い。 ⇔ 空は 青い。

↓
消去

上のa, b の違いは主格補語「空」を受けている「が」と「は」である。この「が」は今まで見てきた「に」、「を」、「で」、などと同じ格助詞であり、これが表すものは述語にとっての主体(動作主)、すなわち主語となるものである。文型によっては対象語(目的語)であることもあるがそれは限られた文型の中でそうなのであり、基本的には前者の主体を表す名詞項目を受けて文の主格(主語)を表す。一方「は」は「が」と同じ位置に現れているが取り立て助詞と呼ばれ格助詞とは全く別の物である。(10)が示すように主格補語である「空」が文の主題として取り立てられ、その時に働く規則で「が」が消去されたため「が」と入れ代わったように見えているのである。取り立てられたbの「空」、b'の「秋の空」はこの文の意味上の主語ではあるが、文の構造上ではこの文の主題である。この二重性のため(9)のように主語を取り立てた場合は主題と主語の区別が余りはっきりとしないのであるが本来この両者は次の(11)にあるように全く違うものである。

(11) a 会場は 裏の地図を御覧ください。(会場=主題 森田良行1995)
 * a' 会場が 裏の地図を御覧ください。
 b 会場が すぐにかきます。(会場=主語)

では(9)のように主語を取り立て主題とする場合の「は」と主格助詞の「が」の使い分けはどのようにすればよいだろうか。今まで見たような格助詞同士のそれ(述語にとり表すものは何か)では説明できない。使い分けの原理として今までの研究でいくつか挙げられているが、それらは取り立て助詞としての「は」の用法から出てくるものである。ま

ずはこの使い分けの原理を内包する「は」の用法を見てみたい。

4. 「は」(取り立て助詞)の用法

2種類の取り立て用法がある。下線部(A~D)が原理を構成する「は」の特徴となる。

4. 1 あるものを主題(テーマ、題目)としてとりたてる

話し手が聞き手との間で話したいと思う共通の話題を「～は」という形で提示することである。この「は」は言い換えれば「～について言えば」と同じ意味を持つと考えてもよい。主題として提示するのであるから話し手と同様に聞き手にとってもその主題(話題)が何であるのかすぐに分かるものでなければならない。従って主題として「は」によって提示されるものは(A)話し手、聞き手双方の眼前にあり認識できるものか、双方にとり既知のものでなければならない。未知のものはテーマとして提示できない。話題自体が何の事か分からなければ話は進まないからである。

- (12) 人間 は 食べるために生きるのではなく、生きるために食べるのだ。
(主題) (叙述部)

話し手はまず聞き手との間に共通の話題を「～は」(「人間は」)で提示する。その主題について叙述部全体で説明や解説をしたり、また(B)その主題に対する自分の意見(判断)を述べたりする(「食べるために生きるのではなく生きるために食べるのだ」)。叙述部には話し手の自由な意見はもちろんのこと、どんなことでも入り得る。(C)全体が主題に関する叙述のため途中で切れる事なく叙述部の最後(文末)まで係ってゆく。

聞き手はそれを受けて、「人間」という話題に対して言いたいことがあれば話を引き継ぎ、例えば「人間は食べるために生きているのが現実だよ。」と応答することが可能である。これら主題文は主題を「～は」の形で提示するが、主語ではないので「は」の前の項目とそれに続く叙述部が常に論理的な関係を保つというわけでは無い。叙述部には主題に関するどんなことでも入り得るのであるから次のような非論理的な文もいくらか可能なのである。

- (13) a 洋子さんは いつ来ますか。 洋子さんは 5月5日です
(洋子=5月5日?)
b あなた 何にする? 僕は コーヒーだ(僕=コーヒー?)
c 夕食は? 夕食は 焼き肉やに行こう。
d ビールは アサヒのスーパードライできまりさ。
e 明日は 明日の風が吹く。
f あなたは 優しい目、だけどとてもブルー。
i その点は 何と言ってもプロですからねえ。

このような文は主語を表す格助詞の「が」には不可能である。かならず主語にたいしての論理的叙述という関係が要求されるからである。

4. 2 同類の事物との (D) 対比(対照)において取り立てる

- (14) a タイで雨は降るが、雪は降らない。
 b 弟はりんごは好きだ。(バナナや桃は?)
 c ヨーロッパで フランスとスペインへは行きました。
 (イギリスやイタリアやドイツは?)

「は」の一番目の用法では主題としてあるものを不特定多数の中から取り立てたのであるが、ここでは同類の物の中からの取り立てである。両方とも取り立てという観点からは本質的に同じものである。上のaは対比されているものが「雨」と「雪」で文中に表現されておりこの用法の典型的なものである。bとcは対比されているものが文中に表現されていないが()内に示されたような対比物を連想させ比較させる文となっている。主題として取り立てる「は」は役割上、文の最後まで係る係り性があるがこの取り立て用方にはその性質は見られない。

5. 「は」と「が」の対立

上でみた「は」の用法から必然的に生じた下線部(A)~(D)の特徴に「が」が本来の格助詞としての役割(述語に対する主語を表す)を越えた次のような対立的特徴を持つ事で対峙し「は」と「が」の使い分けの原理を構成している。

| | 特徴項目 | は[主題] (取り立て助詞) | が[主語] (格助詞) |
|---|---------------|-------------------|------------------------------|
| A | 情 報 | 旧情報(既知) | 新情報(未知) |
| B | 文のタイプ | 判断文(有題文) | 現象文(無題文) |
| C | 係 り 性 | 文末、時にはもっと先まで係る | 次に現れる最初の述語まで (従属節の中の述語まで) |
| D | 同類の 名詞との関係 | 対 比 | 排 他 |

5. 1 A. 旧情報(既知)と 新情報(未知)

これは主格補語の内容が既知なる情報(旧情報)のものなのか、又は未知なる情報、(新情報)のものなのか、という対立であり、前者は「は」、後者は「が」がその主格補語を受けるとされる。その典型的な例が疑問詞疑問文である。

| [旧情報 (既知)]+は | [新情報 (未知)]+が |
|----------------------|-----------------------|
| あなたは <u>ど</u> なたですか。 | どなた <u>が</u> 山田さんですか。 |
| わたしは <u>山</u> 田です。 | わたし <u>が</u> 山田です。 |
| *わたし <u>が</u> 山田です。 | *わたし <u>は</u> 山田です。 |

どちらの疑問文も新情報の（未知な）部分は「どなた」である。眼前にいる、すでに話者が認識した既知である「あなた」は「は」で受け未知である主格補語「どなた」は「が」で受けている。この情報の原理に反する一番下の両者の答え方は非文となる。この原理は早くに松下三郎（1930）が提案し、その後久野暲（1973）、大野晋（1978）、北原保雄（1981）などこの原理を説明している。又この情報という観点からは次項（5.2）の現象文も解釈が可能である。

- (15) a 空が青いよ！
 b あそこに猫がいる。
 c 雨が降り始めた。

これらの現象文は「が」の前の補語は当然であるがそれも含め文全体が新情報を伝えていと解釈される。このように「が」文は一貫して新情報を伝達する役目に関係する。

5. 2 B. 判断文と現象文

これは『ある事を述べるのにまず主題をたてて、それについて話者の意見や判断を述べた文』なのか、または『目の前に起きている現象を何の加工も施さないでありのまま描写した文』なのかで主格補語を受ける助詞が「は」か「が」に使い分けられるということである。

| は | が |
|-----------------------|---------------------------------------|
| a 空 <u>は</u> 青い。 | b 空 <u>が</u> 青い。 |
| a' 秋の空 <u>は</u> 青い | b' (朝起きて窓を開け) 「わあ 空 <u>が</u> 青いよ！」 |
| 判断文 一般論的、超時的なニュアンス | 現象文 個別的、一時的なニュアンス |

aの文はbの文に比べ一般論を冷静に述べている感じがする。それは a' でより一層明らかである。時間を超えた（超時的）一般論が述べられている。一方bの文は一般論に対し、一時的な現象を言葉にしたという感じを受ける。b' の状況が与えられることによりそれが一層はっきりする。

「は」は主題提示の後、それに関する話者の判断や意見が叙述部に続くという判断文を形成し、一方「が」は話者の目の前に広がる情景をそのまま言葉で表現するいわゆる現象文を作るのに欠かせないものである。安藤貞雄（1986）はこれらの現象文はAで扱った情報という観点から文全体が新情報であるという解釈をとっている。

この使い分けの原理は「現象文」と「判断文」という用語を使って三尾砂（1948）により最初に提案されたが野田尚史（1984）は「有題文」と「無題文」という用語でより抽象化して論じている。

5.3 C. 係り性

「は」で取り立てた項目は節を越えて文末まで係ってゆくのに対し、「が」で表される主語となる項目は節の中でしか係らない。この違いが「は」と「が」の使い分けに関係している。

- (16) a 洋子は部屋に入ると ドアに鍵をかけた。
b 洋子が部屋に入ると（母親が）ドアに鍵をかけた。
- (17) a 弘はくじで当たってれば 海外旅行ができたのに。
b 弘がくじで当たってれば（私達が）海外旅行ができたのに。

(16)、(17)とも「は」のaのみ前文の主語が後文の主語にもなっている。bの文では前文の主語は後文まで係ってゆく力を持たず前文とは別の主語（例えば（ ）内）を持つ。すなわち「は」の前の主題は節（前文）を越え文末まで係ってゆくのに対し「が」の前の主格は次ぎに表れる述語まで（従属節内で）しか係らないということである。

この「は」の係り性はしばしば文末を越える事も平気である。井上ひさし（1984）は「は」の係り性の強さを次のように取り上げている。

- (18) 更科そばは、そばの実を特に精製してとった粉で特別の打ち方で調整したものでございます。水が切れてもべたつかず、さらっとしており、又、冬で二日、夏も冷蔵庫にて一日は、風味が変わらず召上れますので昔より遠方にも、お土産としてお持ちいただいております。二十分位お時間がかかります。電話にて、御注文いただきますと、お待たせいたしません。

右（上）の例文は筆者がくすねてきた有楽町更科麴町店の「しながき」の一部分だが、冒頭の「更科そばは」は、コマを越え、ピリオドを越え、息長く、どこまでも長生きをし、ほとんど最後にまで係っている。こういう芸当は係助詞「は」だからできるので、格助詞「が」にはむりである。

このように文末まで、時には文末を越えて係っていく「は」のこの性質をとらえ、とり

たて助詞のなかでも「は」は係助詞と一般に呼ばれる。

上の例とは反対に、独立した1つの句（例えば映画などの題名）を作り出す場合などでは1つの述語があれば事足り、節の中でしかその係り性を持たない「が」のこの性質が利用される。次の(19)では a が選択される。b の句は「は」の係り性のためこの後に続く文末を要求するので収まりの悪さを感じさせ、このような時は使われない。

- (19) a 夕日が輝くとき
? b 夕日は輝くとき

教育現場でもこの係り性における両者の違いは一貫した規則性があり客観的に両者の使い分けに利用できると思われる。

この原理は山田孝雄（1936）により最初提案されたがこの使い分けは従属節の種類に関係することが指摘され南不二男（1974）の従属節の分類を基に、野田尚史（1986）は「は」と「が」の係りを節の種類により整理している。

5. 4 D. 対比と排他

主格名詞と同類の名詞との関係が比較なのか、同類の名詞を全て排除してその主格名詞だけという排他なのかにより「は」と「が」が使い分けられるという原理である。

- (20) a りんごは採れるが、バナナは採れない。
a' りんごは採れる。(ほかの果物はどうか)
b りんごが長野の特産品だ。

aは「りんご」と「バナナ」を比較している典型的な対比の文である。a' は文の中で「りんご」と対比されているものは出ていないが「りんご」と同類のその他の果物と対比していることが感じられる。bでは他の産物は全て排除され「りんご」だけが特産品としてとりあげられている。この「が」の排他のニュアンスは教育現場で問題を生む。

- (21) a 山田さんが日本人だ。(山田さんは日本人だ。) [名詞文]
b 山田さんがハンサムだ。(山田さんはハンサムだ。) [形容詞文]
c 山田さんが日本人であることを知っていますか。
d 山田さんがハンサムであることは事実です。

「が」は本来述語に対しての主語を他の格助詞同様中立的立場で表すだけの役目を持つはずであるが、「は」との競合が可能な状況、とくに名詞文と形容詞文ではこの排他のニュアンスが前面に出てくる。教育現場の初級段階ではこの特殊な意味合いを加えないで表現

することができる（ ）内の「は」文を使うしかない。「が」は主語を表すという本来の役目をこの学習段階では「は」に明け渡してしまっている感がある。しかし不思議な事に「は」との競合が文法的にも生じないc, d文の従属節（イタリック体部分）内では同じ「が」文にこのニュアンスは感じられず本来の「が」の役割で充足している。

排他という用語でこの原理を三上章（1963）が最初に提案したがその後、久野すすむ（1973）が「は」の「対照」に対する「総記」という用語を使って説明している。

6. 「が」と「は」の問題の特徴

以上みてきた上の4つの原理が「が」と「は」の使い分けの基準として働くわけであるが全ての原理は取り立て助詞の「は」の用法から生まれたものであり、その基にあるものは「あるものを取り立てる」という1つの用法なのである。あるものを主題として取り立てるためそれは同時に話者にも聞き手にも既知（旧情報）であることを意味し、主題を立てて話者はなんらかのまとまった情報を伝えようというのであるから、途中で切れたりせずに話者の言いたい事が終わるまで、すなわち文末まで（時には文末を越えて）係って行くことを意味する。目の前に映る現象をそのまま言葉にするのではなく一歩引いて主題を立てて主題にたいする話者の意見や判断を表すため判断文になることもごく自然である。また同じ「取り立てる」という「は」の用法で、取り立てる範囲を同類のものと限定しその中から「対比的にあるものを取り立てる」ということから4番目の原理である「は」の対比の性質が出てきている。格助詞同士がそれぞれ述語に対し何を表すかで平面的に区切られその使い分けがなされているとすれば、「は」と「が」は「は」の用法から生じた4つの原理^(註1)が同時に使い分けに参与するという立体的な構造を持っていると言える。

日本語教育では個々の問題に合わせてこれらの原理の中から一番分かりやすいものを使って説明するのが一般的である。しかしそれはこの使い分けの立体構造の一面でしかない。他の問題を扱う時もそれで解決できるとは限らない。その上この両者の使い分けは「文脈ないし発話を含む状況をどう把握し、なにをどう相手に伝えるかという態度と関わっている性格のものである」（寺村秀夫昭和1978）ため、すなわち発話が起きる状況や発話の意図が深く関与しているためこの問題を一層難しいものになっている。

- (22) ある学校の校長室に新任の教師が初めて挨拶に来て
新任教師：岡田と申します。よろしく申し上げます。
校長：わたしが校長の山田です。こちらこそよろしく申し上げますよ。
- (23) 教員同士の集まりで
校長（山田氏）：私は上田中学校の校長の山田です。

(22) では新任教師があたらしい職場の最高責任者である校長に挨拶にきたのであり『だれが校長であるのか』がこの場ではまず大事なことであるという状況の中で暗黙の質

問『だれ』の答として「私が校長の山田です」と「が」文を使っている。名詞文であり、排他のニュアンスが強く出るので「他のだれでもない私こそが」を意味する。一方(23)は自分についての説明であり、主題を自分にしてその説明をするため「は」を選んでいる。

7. 使い分けの具体的問題例

語用論以前の基本的な学習段階で、これら4つの原理は現場でどのように使えるだろうか。一貫して使える原理はあるだろうか。まず学習者は日本語の母語話者ではないのでBの『係り性(どこまで係るか)』とDの『対比と排他』のニュアンスを感じ取りすることは期待できない。ただ『係り性』においては文法上の使い分けの規則がありその面から利用できる。他は理論的に理解しやすいAの『情報』とCの『文のタイプ』の観点を使う事が考えられる。では具体的な個々の問題を見ていってみたい。

次のaとbの違いはどのように説明できるだろうか。

- (24) 名詞文 a 私は医者です。
 b 私が医者です。(←誰が医者ですか。)
- (25) 形容詞文 a このカメラは安い。
 b このカメラが安い。(←どのカメラが安いですか。)

前に見たように初級の学習段階で扱われるこれら名詞文と形容詞文では「が」は排他のニュアンスが強く前面に出てきてしまうため使えない。中立的なニュアンスで主語を提示できる「は」を使う。この段階では「は」を普通の主語を表すものとして学習者が捉えてもそれはかまわないであろうし、実際そのようである。bの「が」の文はその前の主格補語が新情報の内容で()内にあるような疑問詞疑問文に対する答として説明できる。

- (26) 動詞文 a 教室にテレビがあります。(存在文)
 b テレビは教室にあります。(所在文)

初級の名詞文と形容詞文の終わった段階でこの存在文、所在文が登場する。この段階で初めて文中の主語を表すものとしてそれまでの「は」同様「が」が使われること、また「は」は主題を表す助詞(topic marker)であることが確認される。一般的にaは眼前の情景を描写をした文(現象文)でありaの「テレビ」を主題化するとbの文になると説明される。情報の観点からは存在文は「が」が受けている補語(テレビ)はもちろんのこと、文全体が新しい情報を伝えており会話の初めの部分で登場すると説明できる。

- (27) A:「山田さんが昨日結婚したんですよ。」
 B:「山田さんはまだ若いですよ。」

A: 「ええ、彼女は20才です。」

B: 「でも (彼女は) 若いけれど仕事がよくできますね。」

会話の初めの部分で使われる「が」の存在文同様、最初のAの発話は新しい情報（山田さんが昨日結婚した事）をBとの会話に提供していることから「が」が使われているが後に続く関連した会話文では「山田さん」は旧情報となるため全部「は」で受けている。この情報の原理から次の学習者の間違いが説明できる。

(28) * 昨日山の手図書館へ行った。山の手図書館が公園の近くにある。

(29) * 広場に雪や氷の像はたくさん並んでいます。それらの像がとてもきれいです。

英語では次のように冠詞である a (an) と the の使い分けがこの問題に相当するとされる。

(30) 小さな町にニュージーランド出身の男が住んでいました。その男は物知りだったのでミスターウィズダム (Mr. Wisdom) と呼ばれました。

(There lived a man from New Zealand in a small town. The man was knowledgeable and was called 'Mr. Wisdom' .)

このように「が」の文は新情報という観点から広く説明できる。これに加え文のタイプ（現象文）に関する認識があるならばよりこの情報の原理を効果的に利用できると思われる。「が」の文として野田尚史（1996）は次の3つの文のタイプを挙げている。その中でも特に（31）のような眼前の出来事を表す文は文全体が新情報としてのみ解釈できると考えられる。

(31) あ、雪が降ってますね。（眼前描写）

あ！財布がない！、 あ！、バスが来た！

(32) 昨日ワールドトレードセンターが崩壊しました。（現象叙述）

(33) このボタンを押すとお湯がでます。（法則叙述）

次は係り性の原理から説明されるとわかりやすい誤用例を見てみよう。文末まで係ってゆくのは「は」であり、従属節の中では「が」を使う。

(34) * 私は作った餃子をみんなたいへんほめてくれた。

(35) * 私が地震が起きた時神戸にいました。

(36) * 中国が広いから地方によって生活が違います。

「は」と「が」の問題は学習者にとって一番分かりやすいと思われる使い分け原理をそれぞれのケースに応用するのではあるが、係り性の規則と特に「が」に関しては情報の原理が広く使えるようである。

8. 教科書における使い分けの扱い方

それでは実際の教科書でこのことがどのように扱われ説明されているのか調べてみたい。

8. 1 [みんなの日本語] (2冊から成り全体で50課までの構成)

現在広く日本語教育に使われている「みんなの日本語」の教科書とそれに附随する学習者向けの別冊「翻訳・文法解説(英語版)」で両者に関しての記述箇所を調べてみると次のようになる。なお文法説明は英語で書かれたものを日本語に要約したものである。

| | 課 | 代表的な例文 | 文法説明 |
|--------------|----------------|--|--|
| 主題 | 1 | 私はマイク・ミラーです | ・「は」は文の主題(topic)を表す |
| 主語と主題 | 10 | あそこに佐藤さんがいます。 ミラーさんは事務所にあります。 東京デズニーランドは千葉県にあります。 | ・「佐藤さん」が主語で「が」を使う。 ・「ミラーさん」を主題とすると「は」になる。 |
| 現象文 | 14 23 29 | 雨が降っています。 音が小さいです。 電気がついています。 | ・自然現象は「が」を使う。 ・眼前の現象をそのまま描写する時は「が」を使う。 |
| ～は ～が | 16 | 大阪は食べ物がおいしいです。 ～は ～が + 形容詞 | ・「は」は主題で「が」は形容詞が表す内容の主語 |
| 従属節 (係り性) | 16 22 25 | コンサートが終わってから食事しました。 これはミラーさんが作ったケーキです。 友達が来る前に掃除します。 | ・従属節(テ形+から)中の主語は「が」でうける。 ・連体修飾節中の主語は「が」 ・「前に、たら、とき、ても」などを使う従属節中の主語は「が」 |
| 詞疑問文 | 10 12 24 | 受け付けに誰がいますか。 一年でいつが一番寒いですか。 誰が手伝いに行きますか。 | ・主語が疑問詞の時は「が」 |
| 対比 | 27 | ワインは飲みますが、ビールは飲みません。 | ・対比(対照)を表すのに「は」を使う。 |

1課で「私は～です。」の説明として「は」はtopic markerであり「私」は主題であると説明されているが学習者にとれば「私」は意味的にもこの文の主語と考えるしかない。10課に入って主格助詞「が」の文が登場して「は」の主題文と対比される。この時に初めて主題を持つ文とは何かを具体的に理解することになる。16課の両者が1つの文に存在するような文型では主題文に関する理解がより深まるとと思われる。10課以後は、「が」が上の表にあるように随時登場することになるがそれぞれの文型に「が」が組み込まれ文型全体として覚えてゆくようになっていく。「が」を使う理由や両者の使い分けに関する説明はなされていない。

8. 2 [Japanese for Busy People] (3冊から成るがBook I, IIの50課で文法の基本が学べるように構成されている。)

非漢字圏学習者(特に日本で働いている人)によく使われるsurvival Japaneseの教科書である。存在文を扱う8課から9課で「みんなの日本語」の10課同様、「が」の導入がありその文法説明として「みんなの日本語」では言及していない「新情報(既知)」という観点から「が」の用法を説明している。

Particle **ga**: Subject marker.

When a subject is introduced for the first time, or when the speaker believes the information to be new to the listener, the subject marker **ga** is used after the noun.…… **Ga** is also used when the subject is unknown, i.e., with question words like "who" and "what". (66P.)

「が」を主格助詞(subject marker)と紹介し、ある題材が初めて会話に導入された時、又は伝達内容が新情報であると話者が考えた場合主格名詞(補語)の後に「が」を使う。又疑問詞を含んだ文の場合にも使うと説明している。「は」については「topic marker」という説明がこの本を通じて随所に見られる。

8. 3 [Situational Functional Japanese] (3冊から成り各冊8課の構成)

この本では4課ごとに文法のまとめがあり、疑問詞疑問文や存在文が既習となった最初の「まとめ1」でやはり情報面から「は」と「が」が比較できるように説明されている。

が is used when a situation or happening is noticed for the first time.

コーヒーを飲みました。お金を払いましょう。あ、お金がありません。

は is used when both speaker and listener share a common topic.

ビールを飲みますか。—いいえ、ビールは飲みません。

In this way, **は** is usually used when a speaker refers to something that has already been mentioned, or with which both speaker and listener are familiar. (103~104P.)

「が」はある状況や出来事を初めて認知した時に使い、「は」は既に言及があった(既出の)もの、又は会話当事者二人がよく知っているものについて使うと解説している。

『みんなの日本語』のように文型に組み込むことで使い分けの原理にはほとんど説明を加えない教科書もあるが学習者が大人であることを考えると何らかの手がかりとなるような一貫性のある原理は説明した方がよいのではないかと思われる。

9. 授業への提案

今までの考察から基本的に次の3つを提案したい。

1. 独立性の高い従属節以外の多くの従属節内の主格は「が」で受けることが決まっているので複文が登場する段階で「が」を使うことを1つの規則として学習者に教える。
2. それ以外のいわゆる主文（主節部分）では主格は普通「は」で受け、「が」はその前の主格項目又はその項目を含む文全体が聞き手にとり新しい情報（未知）内容であると話者が判断した時に使うことを教える。これに関連して現象文などについての文の類型を説明することも助けになると思われる。
3. 初級最初の段階の名詞文、形容詞文の学習が終わってからは、存在文（～に～がある／～は～にある）や「(主 題) は (主 語) が～ (例：彼は背が高い)」の文型、又うなぎ文のような主部と述部が論理的関係を持たない主題文などで「は」の主題を表す役割とその性質を積極的に説明してゆく。

10. おわりに

取り立ての用法から出た「は」の性格（特徴）に対抗するかのように「が」は主語を表すという格助詞本来の機能を越え、ほぼ対立的な性格（特徴）を持ちつつ「は」と対峙している。他の仲間の格助詞には見られないこれらの色々な様相は「は」との競合から生まれたものなのだろうか。この「が」は多かれ少なかれ常に排他のニュアンスを持ち、特に名詞文と形容詞文においては排他の意味が前面に出てしまい、中立的な意味でただ単に主語であるということを示すことができない。逆に「は」の方が特別な取り立てという意味合いを感じさせない中立的な立場で主語を提示できている。このことから日本語学習で名詞文、形容詞文が中心となる最初の部分は「は」の主題文であり、この段階で「は」を'topic marker'として紹介することはほとんど無意味な感すら与える。主語を取り立てる（「は」文）のか取り立てない（「が」文）のかという選択は無く、「は」でしか特殊なニュアンスをくわえずに主語を表現することができないからである。

しかし不思議な事に「は」との競合が起きない従属節内においては「が」は本来の主格助詞に戻り、名詞文や形容詞文であっても中立的にただ主語を明示する役割で十分充足している。このような一連の言語事実はどのように生まれたのであろうか。「が」が本来の格助詞の役割に留まっていればこのような使い分けという教育現場での難題も生まれなかったかもしれないが、同時に「が」と「は」の使い分けに見られる言葉の味わい深さもなかったことになる。興味深いことである。

なお「は」と「が」に関して本論では取り上げなかった観点や議論があるがここではあくまで日本語教育との関連から取り上げる立場を取った。

注

1) これら4つの原理に、「は」の主題に対する解説、説明をする措定文、それに対立する「が(は)」の指定文という原理を加える場合があるが両者とも名詞文であり日本語学習では基本的「は」を使うためここでは使い分けの原理には加えていない。名詞文の「が」は情報の原理から説明される。

引用文献

- 寺村 秀夫 1978 『日本語の文法(上)』国立国語研究所
森田 良行 1995 『日本語の視点』創拓社
井上ひさし 1984 『私家版 日本語文法』新潮社
スリーエーネットワーク編 1998 『みんなの日本語 初級I』スリーエーネットワーク
スリーエーネットワーク編 1998 『みんなの日本語 初級I 翻訳・文法解説英語版』
スリーエーネットワーク
国際国語普及協会 2001 『Japanese for Busy People 1 Revised Edition』講談社インターナショナル
筑波ランゲージグループ 1991 『Situational Functional Japanese Vol. 1』凡人社

参考文献

- 久野 暲 1973 『日本文法研究』大修館書店
大野 晋 1978 『日本語の文法を考える』岩波書店
安藤 貞雄 1986 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
三尾 砂 1948 『國語法文章論』三省堂
南不 二男 1974 『現代日本語の構造』大修館書店
野田 尚史 1984 「有題文と無題文-新聞記事の冒頭文を例として-」『国語学』国語学会
野田 尚史 1986 「複文における「は」と「が」の係り方」『日本語学』明治書院
野田 尚史 1996 『「は」と「が」』くろしお出版
三上 章 1963 『日本語の論理』くろしお出版
松下大三郎 1930 『標準日本口語法』中文館書店(復刊 勉誠社 1977)
山田 孝雄 1936 『日本文法学概論』寶文館
北原保雄 1981 『日本語の世界6 日本語の文法』中央公論社

